

# 地域文化と青年の学びをどうつなぐか

～鹿児島県の地域文化継承活動の現場と青年の学び～

(一財)鹿児島県青年会館・艸舎 理事 池水 聖子

## 1. テーマ「若者がつなぐ地域文化」

### (1) 青年団事業・一般公開プログラムで開催

令和5年1月末に開催された鹿児島県青年団協議会（以下県青協）主催の青年交流研修会は、「若者がつなぐ地域文化－私たちは地域文化とどう向き合っていくか－」というテーマで基調講演とパネル・ディスカッションを実施しました。例年県内の青年団が集まる研修ですが、今年度は、一般公開プログラムとして開催しました。地域文化継承活動が様々な分野で、危機的な現状を踏まえ、より多くの人に参加してほしいと、今年度から「子ども・若者プラットフォーム事業」を立ち上げた鹿児島県青年会館・艸舎と県青協が一緒に企画、準備を進めました。

当日は、県内の青年団のみならず、若手の役場職員や大学生、短大生、伝統芸能継承活動に取り組む一般の参加者も含め、50人以上が会場に集まりました。今年の夏は全国高等学校総合文化祭「かごしま総文」が開催されるという事もあり、行政の関心も高く、実行委員会の高校生がそのPRのためにも参加するなど、鹿児島の今の多彩な芸術文化活動に触れる機会となりました。

### (2) タネガシマン誕生

基調講演は、種子島アクションクラブ代表の高磯勝俊氏（55）です。種子島に育った子どもなら誰でも知っている「離島（りとう）閃隊（しえんたい）タネガシマン」の仕掛け人です。

タネガシマンが誕生したのが、1999年、青年団活動が基礎となり、その後24年、活動を続けるエネルギーの一端を知る講演となりました。演題は、「仮説『ど・ローカル閃隊論』」です。「離島閃隊タネガシマン」の「閃隊」はもともと「戦隊」でした。島民の暮らしが閃くように、また、タネガシマンがどんなステージでも楽しいアイデアが閃くようにという思いが込められ、平成26年に閃光の意、ひらめくという字に改称しています。そして、種子島の方言では、「せん」が「しえん」と訛ることから、「閃隊」としています。高磯氏は、「自分たちは種子島のことしか考えていない、大人が真面目に、そして真剣に遊んでいる活動が他の地域に当てはまるか全くわからないですよ」と言いながら、会場の皆さんと一緒に考えた

いと講演をはじめました。



写真1：交通安全の事業でも活躍する「離島閃隊タネガシマン」  
(写真提供 種子島アクションクラブ)



写真2：悪天候から条件付き出発の中、ようやくたどり着いた種子島アクションクラブ代表の高磯勝俊氏（鹿児島県青年会館・艸舎 2023年1月）

### (3) ローカリズムを体現するタネガシマン

タネガシマンは、90年代後半に誕生した島の地域ヒーローです。この時代は、失われた30年（経済成長しない時代）と言われ、デジタル社会へと急速に変化する時代でもあります。高磯氏は社会の変化と重ね合わせながら「タネガシマン」をグローバリズムとローカリズム、デジタル技術とアナログな現実の4つのキーワードで、自己分析しました。タネガシマンが誕生できたのは、インターネットがもたらした情報社会、「ヒト・モノ・カネ」が区域を越えて自由に行き来できるグローバリズム的思考によるものだと説明します。まず、タネガシマン

の発想が、島にルーツを持ちIターンで移住してきた青年によるものだったそうです。青年団活動に大きな魅力を感じた彼は、町主催の夏祭りを青年団で乗っ取ろうという計画に始まり、島初のサッカーワールドカップのライブビューイング実施、島の子どものために「なかたねちびっこふえあ」の開催など、これまでの島の青年団の集まりからは考えられなかったアイデアを次々と持ち込んだそうです。さらに彼は行政予算や全国離島振興センターの補助金も獲得、日常の排外主義や固執主義に固まった島の青年達にゆさぶりをかけてきたと言います。1995年青年団の流れをくむ「種子島アクションクラブ(TAC)」が誕生します。これは、青年団の「地元仲間と一緒に、何か楽しいことをやりたい」と常に願っている青年団活動の延長だったということです。「アクション」としたのは、青年団活動には、欠かせない歌や踊り、ダンス、演劇など、身体を使っただけの活動から、「行動する・実践する」という意味の2つの意味が付加されました。

#### (4) デジタルとアナログ

##### —アナログな作業から生まれる想定外

高磯氏は、「タネガシマン」は、島の区域を超えたグローバリズム的に思考によって誕生、しかし、その主体はローカリズムの象徴である青年団活動であったと振り返りました。

そして、もう一つのキーワード、デジタルについても興味深い解説でした。デジタルは、すべてが、0と1でしか表せない世界、その0と1の間を埋めるのは、実は、昔ながらのアナログな作業しかないと言うのです。そのアナログの作業とは、時間と手間をかけ、仲間呼びかけ、語り合うという連続性のある行為であり、その連続の行為は、仲間の中に信頼というものを生み出したと言いました。

現在のタネガシマンは、島内のみならず、県外からも声がかかる存在です。島内イベントの各種ステージから、行政のPR、老人会や同窓会、病室のたった一人の子どもの前にも登場します。これまで手掛けた台本は330本、すべてが1回限りの公演、時間と手間をかけ、依頼主の現場へ足を運ぶ、この地道なアナログ作業の連続の上に、時折、神がかり的な閃きが生じる、そんなことが起こるからやめられなかったと話します。アナログ作業で集めてきた情報をデジタルで編集し、映像化する作業もスピード化し、どんな課題にも新しい脚本を仕上げていくことが可能になったということです。

#### (5) 仮説『ど・ローカル閃隊論』

さらに高磯氏は、スマホ世代の若い人たちに、次のよう

に言いました。「自分にとっての本物の情報は種子島にしかない。自分の知りたい事を知るためには、直接人に会い、現場に足を運ばないと得られない」と言い、「スマホの情報は本当かと疑うことが必要だ、実は足元にあるふるさとの史跡や文化遺産の中に先人達の本物の情報と知恵が詰まっている。それを学ぶことで自分自身に元気とパワーが与えられる」と話しました。

仮説『ど・ローカル閃隊論』とは、タネガシマンは、グローバルな発想で誕生し、種子島の青年団活動というアナログな作業、時間と手間をかけた語り合いから生まれた信頼に基づく共同作業、自分のふるさと、種子島の魅力を伝えたいという思いの連続の中に、時折神がかった想定外がもたらされてきたものだとまとめました。グローバリズムとデジタルを「道具」として使いながら、ローカリズムを体験すること、このローカリズムをこそ、今、地域の皆が求めているのではないかと会場に投げかけました。

基調講演を受け、パネル・ディスカッションでは、各地で、それぞれの文化活動に取り組む青年団出身者に登壇してもらいました。行政職員として市民参加のミュージカルのイベントを実施後、NPO法人きりしま創造舞台を立ち上げ、現在、子どもから大人まで出演する市民参加型ミュージカルを運営している現場からの声を聞きました。また、幼少期から参加していた子ども劇場を土台に、青年団の演劇活動を経て、母となり、今度は親子で子ども劇場の活動や地元の演劇活動に参加しながら、今では実行委員長として大口子ども劇場を運営している報告がありました。私自身は、伝統芸能継承活動が青年組織を形成し、地域づくりに大きな役割を果たしている事例を報告しました。それぞれの登壇者が今でも活動を続けている原動力を紐解きながら、これから若い人たちが、どう地域文化に向き合う可能性があるか、参加者の課題も聞きながら話し合いました。

一般公開プログラム後、1泊2泊の研修参加者は、夜の交流会を経て、翌日は桜島を訪れました。桜島では、小学校跡を活用した改心交流センターとゲストハウスUlalaを視察、日本みつばち再生の取り組みの様子やファームランド桜島を訪問、桜島大根の収穫現場を視察、子ども食堂用の大根を受け取る等、多彩な桜島を体感する研修を実施することができました。



写真3：基調講演の高磯氏もそのまま登壇し、パネル・ディスカッション  
(鹿児島県青年会館・艸舎 2023年1月)



写真6：ファームランド櫻島で桜島大根を受け取った  
青年交流研修会参加メンバー



写真4：市民参加のミュージカル  
(写真提供 NPO法人きりしま創造舞台)



写真5：大口子ども劇場で取り組む米づくり体験活動  
(写真提供 大口子ども劇場)

## 2. 伝統芸能継承活動から生まれた青年組織（さつま町中津川地区・吾友会の例）

### (1) 伝統芸能継承活動にみるアナログな作業

中種子町連合青年団から生まれた「種子島アクションクラブ」の活動を聞きながら、衰退の危機にある伝統芸能継承活動について、『ど・ローカル閃隊論』をあてはめ、分析できることに気づかされました。

現在の多くの伝統芸能が地域コミュニティの衰退とともに減少しているにもかかわらず、新たな再生の動きもあることに着目し、2015年からさつま町中津川地区の伝統芸能継承活動を調査してきました。中津川地区では、伝統行事「金吾様踊り」があります。地元の大石神社の境内で地区内5集落が競い合って芸能を奉納します。その中で、55年ぶりに「地割舞」を復活させた活動です。地区公民館長を引き受けた米森十一氏が、公民館活動の柱に「伝統芸能による地域おこし」を掲げます。最初、「地割舞」復活は地域住民から猛反発を受けます。最後に舞った世代が80代になり、このままでは、一度失われた芸能の継承はさらに厳しくなると、20代～30代の地域の若者を集め、約7年の歳月をかけ、芸能復活に取り組みました。

それは、実にアナログな作業の連続でした。公民館長は、「もう昔の事は忘れた」と相手にしない古老への説得、なかなか乗り気にならない若者たちへの呼びかけを時間と手間をかけて粘り強く続けます。

映像等の記録資料が圧倒的に不足する中、ガリ版刷りの『南九州郷土研究』（昭和47年発行）に下野敏見氏の調査記録を発見、その中に記載された「地割舞<sup>2</sup>」のスケッチと楽の

記録を頼りに作業を進めます。カタカナ表記の楽や断片的な描画、古老の記憶が頼りの再現作業は難航します。2～3年が過ぎる中、神がかり的な想定外は、古老の一人から不意に笛の音が蘇ります。笛の音は、さらに古老らの舞の動きの記憶へとつながります。最初はいいやや参加していた若い人たちが、公民館長や古老たちの真剣さと熱意に感化され、徐々に伝統芸能にのめり込んでいきます。祭りの舞台上、「地割舞」を披露するという大役を果たした後、この若い人たちは、少しずつ自分たちの活動を模索し始めます。そして、青年組織「吾友会」を発足させました。

## (2) ローカリズムの体現としての伝統芸能継承活動

彼らは伝統芸能継承というまさにローカリズム、そのものの活動に関わることで、自分たちの足元の歴史や文化に、本物の情報として触れることができたのだと考えられます。伝統芸能継承という一つの目的で集まったメンバーが、今度は地域の課題を発見し、0から1を生み出すこと、自分たちのやりたいことを探す作業が自然と生まれています。

実際、各地の民俗芸能や祭りが、地域の人たちの日々の労働の合間の楽しみとして、また、「遊び」として受け継がれてきたものと捉えると、伝統芸能継承活動そのものに、地域の主体を形成する様々な要素が内包されていると考えられます。中津川の若い人達は、地域で本気で遊ぶという体験を、伝統芸能継承活動を通して味わったということになります。この体験を通して、「地元仲間と一緒に、何か楽しいことをやりたい」という単純な動機が共有され、自然と青年組織を形成することにつながったと考えられます。今では、祭りを奉納する大石神社の整備や公民館の補修、高齢世帯の農作業のサポートや子ども向けの季節の行事を開催するなど吾友会として様々な活動を続けています。

吾友会のメンバーの一人は、地域の人たちのたまり場をつくらうと、中津川地区内に居酒屋を開業しました。大工の経験のある彼は、地域の人たちが集まって、語り合う場所を自ら手で新たに作り出し、地域に新たな活力が生まれています。

## (3) 伝統芸能を支えるデジタルとグローバリズム

中津川地区の伝統芸能の継承・復活に関わる活動は、デジタルとグローバリズムという道具にも支えられています。その芸能復活の経過は、公民館長のカメラに記録され、公民館内に展示、地域住民の目に触れることになりました。また、装束の再現や、祭りの広報やチラシ制作には、女性も協力、



写真7「金吾様踊りの「地割舞」  
(さつま町中津川大石神社 2016)



写真8「吾友会の打ち合わせ風景  
(中津川地区公民館 2020)

裁縫やイラストの技術が加わり、多くの地域住民が関わる芸能継承活動へと広がりました。地区内で栽培した黄金千貫の唐芋を使い「金吾さあ」という焼酎をつくりました。県人会など出郷者の集まり等で販売、「金吾様踊り実行委員会」の資金源となりました。また、各集落の芸能名が型染されたのぼり旗にスポンサー制を導入、住民の名前入りの旗を制作、祭りの始まる前から雰囲気盛り上げるようになりました。

青年団活動が基になり、ローカリズムの体現としてタネガシマンが生まれたことと、同じくローカリズムを体現する伝統芸能の継承活動が、青年組織「吾友会」を生んだことは、それぞれ地域の中で、自己認識を通しての自己変革が生まれたことによる主体の形成、地域文化の担い手が生まれるプロセスだと捉えることができます。

タネガシマンがマスクプレイ・アクション創作劇の地域ヒーローであったように、昭和初期甲冑姿に御幣で顔を覆い、各地区から選ばれ地割舞を舞った青年らは、同じく当時のヒーローであったに違いありません。

伝統芸能継承活動そのものが、常に地域住民の暮らしの中で変化しながら受け継がれてきたものであり、ローカリズムの体现であるならば、その活動の中に、地域文化の主體的な担い手を育む要素が必ず内包され、そこに必ず「学び」の仕組みが働いているはずだ。<sup>3</sup>

### 3. 分断を乗り越えて

#### (1) 分断の時代

シンポジウムの中では、タネガシマンやそれぞれの地域文化活動から共通して見えてくる課題について、会場と一緒に話し合われました。青年団活動をしている参加者からは、今の悩みとして「仲間が集まらない」、「それぞれがバラバラで同じ目標を持ってない」等の発言がありました。これに対して、登壇者が口を揃えて、それは県下に数千人の青年団員が存在していた30年前も同じ悩みを持っていたというのです。当時はひたすらアナログな作業で突き進むしかなかったが、現在は、デジタル技術を持っているがゆえに、便利さとともに深刻な分断が生じているのではないかという事が指摘されました。

スマホなどデジタルな道具のない時代には、すべての作業をアナログでこなすしかなく、常に地域で生活するリアリティにさらされる日常だったということです。0から1を、それは常に自分たちで作出すしかなかったと。しかし、実はそれこそが面白い事であり、とても大切な経験だったというのです。「トライ・アンド・エラー」の連続です。この体験が登壇者の今の活動を支えているということもディスカッションを通して見えてきました。

今の子どもや若者の生きにくさは、すべてが決まった形の中でしか動けない社会から来るのではないかという発言もありました。学校でも地域社会でもこれもダメ、あれもダメという風潮や規則は、より分断を生み、地域でどう遊ぶかまで規定されている世界だということです。好きな事を何でもやっている、0から1を生み出す「遊び」のおもしろさを経験できていない事が、原因ではないかという発言もありました。今の子どもや若者は「自分のやりたい事」を生み出す体験ができていないということです。

#### (2) 最先端の島暮らし

高磯氏からは、種子島には、今最先端の生き方をしている人達がいるという例が挙げられました。島に移り住んできているサーファーの事です。彼らは都会の安定した高収入の仕事を捨て、家族を連れ島に移住、日常の中にサーフィンがある暮らしを選択しているというのです。どうして島を選んだ

のかたずねると種子島は風や波の様子を見て東西南北、30分以内でいつでも波乗りに行ける最高の場所だと言うそうです。自分の本当にやりたい事をしっかりやるという生き方です。さらに彼らは、サーフィン仲間に声をかけ、まるで青年団のようにボランティアで海岸清掃をしたり、島の子ども達にサーフィン講習会を開催したりと実に島の事を考えて行動しているということでした。島のサーファー達を見ていると、もう時代は転換期にあるというのに、今の若い人達は、本当に自分のやりたい事がわからなくなっているのではないかという指摘もありました。

### 4. 鹿児島の本物の文化を知る・つなぐ活動

#### (1) 鹿児島の豊かな民俗文化を知る

鹿児島県青年会館・艸舎は、2001年からはじめた「地域再発見のための読書活動」（県青協・青年リーダー塾同時開催）の中で、先の「地割舞い」の調査を行った民俗学者の下野健見氏<sup>4</sup>を招き、鹿児島の伝統芸能や儀式、食生活、民具や昔話など様々な角度で話をさせていただきました。

「地域再発見のための読書活動」としていたのは、子どもゆめ基金の読書活動助成を活用していたためで、実際は、鹿児島県の民俗文化について若い人たちと一緒に学んでいこうというのが、主旨でした。講師の下野氏は、「私たちの鹿児島県には、芸能1千、民謡1千、昔話が1千もあるのですよ。つまり鹿児島は、口承で伝えるもの、身体で伝えるものの宝庫です」と常に語られていました。下野先生の語る鹿児島の民俗文化は、南西諸島の島々を含め、鹿児島という地を北のヤマト文化圏、南の琉球文化圏の接点（または、裂け目）であるとみなし、さらに大陸からの影響と各地域独自の文化が融合した豊かな文化の古層の上に成り立つ場所だととらえていたところが大変魅力的でした。豊穰なる地域文化が継承されてきたこの地が、私たち鹿児島の本物の情報なのだと言えることが若い人の集まる鹿児島県青年会館・艸舎の使命でもあると考えています。<sup>5</sup>



写真 9：「トカラ列島の民話風土記」下野先生の最後の講演  
(鹿児島県青年会館・艸舎 2020年10月)

## (2) 本気で遊ぶことが学ぶこと

高磯氏は、タネガシマンをいつまでやるかはわからないと言いつつながら、これは「遊び」だから、いつはじめてもいつやめても構わないのだとも言っています。

地域文化をつなぐことは、自分たちの暮らす地域で本気で「遊ぶ」という事です。それがどんなに面白いことかをぜひ一度、若い人たちに体験して欲しいものです。

タネガシマンを生み出した島の青年達が見つかった本当の楽しさは、「東京ディズニーランドに行って遊んできた」＝「お金を払って遊ばせてもらった」楽しさや「スマホのゲーム」、「誰かが作ったゲームで遊ぶ」楽しみではないと言っています。彼らが伝えてくれたのは、一番楽しいのは、「自分たちで考えたことを自分たちで実現する事」だという現場からの実感でした。地域文化をつなぐという事は、自分たちの地域で自分たちが本気で「遊ぶ」ことだというシンプルな事に立ち返ることができたシンポジウムでした。

## (3) 地域で本気で遊び続ける人たち

今回の一般公開プログラムでは、劇団いぶきの公演チラシが配布されました。演題は『春は来る』。2023年2月-みんな春を待っている。コロナ禍を乗り越えて 希望に満ちた新たな春を一とあります。<sup>6</sup>

代表の宮原俊郎氏からは、「知覧町連合青年団から生まれた『劇団いぶき』は創設46年になりました。今回も笑いと涙の渾身の作品をお届けいたします」とメッセージが添えられています。現役青年団時代から地域の課題を取り上げ、演劇を続けてきた宮原氏、当時の仲間とともに次世代の出演者の顔も並んでいます。このように地域で本気で「遊ぶ」ことを続ける人たちがまだ、存在している事が、鹿児島の可能性です。

鹿児島県青年会館・艸舎は、2022年「子ども・若者プラットフォーム事業」をスタートさせました。子どもと地域の人たちへの新しい窓口として、7月から毎月1回子ども食堂をはじめました。始めてみると地域の分断はさらに進んでいるようにも感じています。

実際、県内各地の青年組織は、県青協も含めて、これまでの活動や組織の形を維持することは、非常に困難な状況です。伝統芸能など地域文化の活動も保存会や公民館などの組織では、継承が難しくなっています。これからは、既存の形や組織にとらわれない、新しい仕組みを考えていくことが求められています。0から1を生み出す作業が必要となっています。

地域文化をつなぐことと地域の担い手となる主体を生み出すことは、一体となって進められなければなりません。そのため、青年達のリアリティのある学びの場を作ることが必要です。青年会館・艸舎のような自由な場だからこそ、新しい学びの場を生み出せるはず。それは、そこに関わる私たちにも若い人たちと一緒に地域で本気に「遊ぶ」覚悟が求められていることだと思います。地域が必要としているローカリズムの体現、伝統芸能や青年組織が、遡ると、時代に合わせた姿を変えながら、しぶとく生き残ってきたことを思うとこれからの新しい芽吹きは必ずあると信じています。

劇団いぶき公演

2023年2月！  
みんな春を待っている。  
コロナ禍を乗り越えて  
希望に満ちた新たな春を！

2023年2月25日（土）18：30（開場 18：00）  
2月26日（日）14：00（開場 13：30）

コミュニティセンター知覧文化会館  
前売 一般 1,000円 高校生以下 500円  
※当日 300円増し（当日券は販売しないこともあります。）  
※未就学児の入場はできません。（託児所あります。）

チケット予約  
くらもと写真館  
Tel 0993-83-2326  
メール  
gekidan@ibuki.fun

主催 劇団いぶき 後援 南九州市教育委員会 南九州市文化協会  
令和4年度新たな日常での文化芸術活動支援事業助成対象事業（鹿児島県）

写真 10：劇団いぶきのちらし

- <sup>1</sup> 第47回全国高等学校総合文化祭「2023かごしま総文」昭和52年から各都道府県が持ち回りで開催する高校生による芸術文化活動の祭典、令和5年の「2023かごしま総文」は第47回大会（7/29～7日間開催）、全国開催の一巡目を締めくくる。19の規定部門と3つの協賛部門で発表が行われ、全国から代表の高校生2万人が集まり県内各地で文化祭が開催された。
- <sup>2</sup> 下野敏見「大口・菱刈地方の民俗芸能（8）周辺の芸能①—薩摩町の巻①」『南九州郷土研究』（1972年）米森十一氏はこの記述の中に「地割り舞い」の調査記録を発見、復活の決意を固める。
- <sup>3</sup> 拙稿「地域文化継承から生きる学びをたぐりよせる」鹿児島県の子どもハンドブック編集委員会編『鹿児島県の子どもハンドブック—民間版子ども基本計画—』、南方新社、2021、pp.220-236
- <sup>4</sup> 下野敏見氏（1929-2022）日本を代表する民俗学者。種子島の漁業などをテーマにした研究で第1回柳田国男賞を受賞。『南日本の民俗文化誌1～12』（南方新社）など、鹿児島県の民俗文化について多くの著作を残されている。
- <sup>5</sup> 拙稿「下野民俗学から見る鹿児島文化の豊穡」鹿児島民俗編集委員会編、『鹿児島県の民俗』第162号、2022、pp.13-21
- <sup>6</sup> 劇団いぶき公演『春は来る』2023年2月25日開演、26日上演  
コミュニティセンター知覧文化会館